
R P G W (・ ・) R L D **ぼくのステキなD A 天使サマ**

貝塚ゴロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGW(・・)RLD ぼくのステキなDA 天使サマ

【Nコード】

N2838Z

【作者名】

貝塚ゴロー

【あらすじ】

「突然だが俺は墮天使が好きだ」
「大企業のボンボンが行く、良い子のための墮天使(笑)による異世界譚。」

「えっ、この世界ってサザエさん観れないの？マジで!?!」
ノリと根性、ときどき真剣でお送りするハートフルサスペンスコメディ。

こだわりの持つて、人は初めて強くなれる（前書き）

ハイ、皆さん初めまして。貝塚ゴローです。

この小説は基本的にオリ主視点での話のため、原作主人公達の行動、心情等を詳しく知りたい場合は原作を読むことをお勧めします。

また、「お前前回と今回で話矛盾してんじゃねーか！ クソガツ！」

「ハっ、ここ字イ違いから、俺が教えてやんよっ！」等ありましたらコメントフォームにて放出してください。

こだわりの持つて、人は初めて強くなれる

俺こと桐条瑠依きらいじゆいは万物に対してこだわりと言うものを持ち合わせている。例えば、そう、ボーリングの球だったり、カラオケの機種だったりもそうだ。

歴史上、何か功績を残している人物というものは総じて譲れない何かを持ち合わせているものだ。

こだわりの持つて者は天下を取る、とあの豊臣秀吉も言ったり言っ
てなかつたり。

とにかく、俺はこだわりを大事にする男だ。

そして、それはゲームに対しても同じだ。まず、ゲームを始める前に俺はそのデータを自分に都合の良いように改鑄する。

と言っても原型はなるべく保ったまま気に入らない部分だけを挿げ替えるみたいな感じでだ。

開発者への冒涇だとか、そんなものは関係ない。何度も言うが俺はこだわりを大事にするのだ。

話は変わるが、俺の父さんは大企業の社長だ。桐条グループと言えばそりゃいろんな事業に手を広げている事で有名だ。

大体そこらへんで物を買ってくれば五つか六つぐらいは桐条の名が入っている事からもそれはうかがえる。親父エ。

それで今度はゲーム部門にも手を出したらしい。『ギヤスパルクの復活』と言う今時捻りも無いネーミングだが、エンパイア社との共

同開発が進められていて、先月ベータ版のテストプレイヤーの募集が始まった。

このソフトのゲーム機は満点堂から出ているZIEEで、ハード自体が発売して間もないのである種の人柱要素が含まれていない訳でもない。

このゲームのマーケティングには「細部まで本元見紛うばかりに構築された3D世界!」「自動生成されるNPCやクエストによって無限に続く冒険!」「物語はあなたが作る!」とか非常にゲームの興味を引く文句が並べ立てられてあって、俺は2chで袋叩きのやんぱにされるかと心配していたのだが、予想と反して書き込まれたのはゲームを絶賛するコメントだった。

父さん……スマン。俺、あんたの事疑ってたぜ。

ところで俺もこのゲームを持っている。
別に応募に当選した訳ではない。

兄さんがゲーム開発部門の主任を務めていて、この前ふらりと現れて置いていったのだ。

一応、貰った事だしプレイしてみようとした俺は、データを弄ろうとして手を止めた。どうやら既存のゲームとは違った格納方式が使われているらしく、まずデータが開けない。

ほんと困り果てた俺は、実家の兄さんのPCを漁った。自分のこだわりの為には妥協はしない、これが俺の忍道なのだ。

兄さんは割と仕事を持ち帰る人らしく、PCの中には『ギヤスパルクの復活』の開発に使われたツールやら何やらがそのまま残っていた。……それでいいの科主任よ。

何はともあれ、まんまと目的を達成した俺はさっさと改造を始める事にした。

作業を始めると、このゲームの作り込みの深さが感じられた。まず、外装データの種類が豊富だ。何千と揃えられた3Dグラフィックはこれだけでどれだけの

時間をかけたのか、開発陣の苦労が窺い知れる。他にも多種多様な職業のデータが陳列されている様は俺の改铸魂を燃え上がらせた。

俺は三日三晩それこそ一睡もせずデータを弄り倒し、朦朧とした意識のまま、俺好みに改造した『ギヤスパルクの復活』のROMを片手に床にぶっ倒れた。

三ヶ月後。

あれから俺式改造『ギヤスパルクの復活』をプレイし続け、いい感じにキャラクターも育ってきた。

『ギヤスパルクの復活』は何百という数の職業の中から一つを選択し、職業ジョブごとに異なるスキルでもって冒険を進めていくというのが基本コンセプトだ。

戦闘方法はエンカウント方式ではなく、広大なフィールドにスポーンするモンスターをリアルタイム制で葬っていくという点が非常に俺の好みであった。

ちなみに俺の職業は墮天使、このゲーム風に言うのならダテンシだ。『ギヤスパルクの復活』にはそんな職業はなかったが俺が外装やら能力やらをツールで弄って作り上げた。

墮天使こそ俺の正義ジャスティス、異論は認めない。けっして俺が中二病患者であるとかではない。そう、断じてない。

「さーて、今日も熟練度上げに勤しみますかねえ」

『ギヤスパルクの復活』はスキル熟練度制ではないが、俺が勝手にシステムを変更した。ティンときてやった、反省はしていない。

このスキル熟練度制、スキルを使えば使うほど熟練度と言う名の経

験値が溜まっていき、一定値に達するとスキルレベルが上がってスキルの使い勝手が良くなっていくシステムだ。

俺はなにかとキャラクターが成長していくのが大好きなのだ。

他にも俺が勝手に変えたシステムは多々あるが、ここでの詳細は省く。

とにかく、俺は今日もレベル上げとスキル熟練度を稼ぐためにモンスターをひたすら狩っていた。今は春休み前ではあるが、俺の通っている学校は開校記念日と土日が重なって三連休だ。時間はいくらでもある。

「あー、やべえ。サザエさんの時間じゃん。一旦休むか」

サザエさんは社会によって荒んだ俺の心を癒してくれる。関係ないけどタちゃんてエコカーのCM出てるよね？声の人。

サザエさん一家が家へと帰ったところで、テレビの入力を変え、再び『ギヤスパルクの復活』をプレイし始める。

その後はコンビニに夕飯を買いに行つて、食べ終わると直ぐにテレビに向かいなおった。大企業の子だからって夕飯コンビニで済ませちゃダメとかそんな事はない、断じてない。

ドワゴが日付が変わったことをお知らせしたところで、テレビの電源を切つてベッドへ向かった。

この日、俺はすんなりと眠りにつく体勢に入ることが出来た。いつもは横になつてもしばらくは眠れなかったのだが。

不思議には思ったものの、眠りたいと言う欲求には勝てず、俺は^{まぶた}瞼を閉じた。

ごだわりを持って、人は初めて強くなれる（後書き）

お疲れ様です。

とりあえず原作一巻ラストまでは大方書きあがってますので、そこまで間隔が空くことはないと思います。

知らない町に来たらとっぴあええ酒場に行けって、うちのじいちゃんと言ってた。

投下します。

知らない町に来たらとりあえず酒場に行行って、うちのじいちゃんが言った。

この日、俺は背に土の感触を感じることで眠りから覚めた。辺りは木々が鬱蒼と生い茂っていて、如何ともしがたい不気味さを放っていた。

「……はい？」

思わず呟いてしまったのもしかたがないだろう。それだけ俺は混乱していた。

考えてみてほしい、寝て起きたら森の中でした、なんてあるか普通？少なくとも俺はない。

兄さんとのキャッチボールの最中に父さんの大事な壺にボールをぶち当てて粉碎したときもそれはなかった。

なんで俺だけ怒られたかとか、そういうのは気にしない。

とにかく、現状を確認してみない事には何も始まらない。落ち着きに定評のある桐条瑠依きりょうるいは狼狽ろうたいえんのですよ！これしきの事では。

自分の服装は見た事のない物に変わっている。というのも、白を基調としたロングコートに所々金色の帯で十字に締めてある服で、どつかの格ゲーのキャラが着てそうな服だ。

いや正確には、現実で見た事のない、が正解だ。

俺はこの服を見たことがある　　テレビ画面越しに。

そうだ、この服は『ギヤスパルクの復活』で俺のキャラクターが装備していたものだ。

これはあれだろうか、ゲームの世界に訪問しちゃったとか、そーい

うことだろうか。

だが俺が履いているのは寝るときに足元に置いていた家用のスリッパだ。

しばらくうんうんと唸っていたが、情報が少なすぎてまだ判断は下せない。

どちらにせよ異常な事態であることに違いはない。

どうしようかと悩んだが、こういうときは、まず最初に現地人を探すのがセオリーである。

そこから俺の行動は素早かった。藤岡隊長ばりのサバイバルスキルでもって木々の間を抜け、あっという間に森を脱出することに成功した。

そして、俺は平野にいる。

先程の森を抜ける過程で分かった事だが、この世界は『ギヤスパルクの復活』の中である可能性が高い。

森を抜ける道中、俺は危険な生物やらに出会わなかった事で危機感が薄れていたのだが、不意に何かの気配を感じて比較的幹の大きい木に身を隠した。

『ガードアント』。軽自動車ほどの体格を持ったそれは、獲物を捕食するのに使うのだろう罠トラップをガチガチと打ち鳴らしながら、身を隠した俺のすぐ真後ろを通り過ぎて行った。

正直、冷や汗が止まらなかった。人間は自分より大きな生物に対して潜在的な恐怖を感じるといふ事を差し引いても、あの怪物と言ってもいい様相に俺は軽くパニックを引き起こした。

あれから、怪物と遭遇する事なくここに辿り着けたのは運が良かった。

そして、俺は今になってあの怪物の異常さに気が付いた。

まず、何故奴の名称が『ガードアント』だと分かったのか。

俺はあんな生物の名称なんて知らないし、そもそもあんな化け物が地球に生息していたらダスキンは今頃ひっぱりだこだろう、効くかは知らないが。

では、何故か。

ご丁寧に奴の頭上に表示されていたのだ。『ガードアント』、と。

いや、知らない訳ではなかった。俺は奴と対峙したことがある……これもテレビ画面越しにはあるが。

『ギヤスパルクの復活』ではゲームのスタート位置は完全にランダム式に決められる。そして、俺のゲーム開始時の位置はアルダ村というプレイヤー拠点の近くの森だった。

俺のキャラクターがフィールドにスポーンし、さあいくぞ、と意気込んだところで奴に又ツ殺されたのは記憶に新しい。

後にも先にも、スタートした瞬間に死亡するゲームなんてこれきりだろう。

そして、今日目が覚めた場所も思い返すとどことなく既視感があったような気がする。

さらに、モンスターの頭上に名称とHP、MPヒットポイントが表示されている。これもこのゲームの特徴だった。

いよいよもってここがゲームの世界であると言つ線が濃厚になってきた。

これから帰れるかは別にして元の世界に帰れる方法を探るか、それともこの世界をエンジョイする道を進むか。

どちらにせよ、まずは情報を集めなければいけないだろう。

「……とりあえず、町にでも行きますかねえ」

あれから長つたらしい道なき道を歩き続けた俺は、眼前に泰然とそびえ立つ門を見上げた。

出発した頃には昇っていた太陽も今は沈みかかっている、今になってどつと疲れが押し寄せてきた。

この門の先にあるのはメルダの町。それなりに発展しているようで、もう夕方だというのに客寄せの声などが門の外のこちらにまで聞こえてくる。

とにかく、中に入らない事には始まらない、と俺は門の前で槍を片手に持った衛兵らしき人に話しかけた。

「すみません、旅の者なんすけど。町に入れてもらえますか？」

「ん？ああ、構わんぞ。ちょっと待つてる今門を開ける」

どうやら簡単に入れてもらえるようだ。

俺は軽く礼を言っけて門を潜った。

さて、何故俺が近くのアルダ村に行かずにわざわざ半日も歩いてこの町にきたのか。

ずばり、情報収集の為だ。古来より情報と言うものは人の多い場所に集まると相場が決まっている。

ドラクエのルーダの酒場然り、なんか教えてくれるだろ？ヒントとか。

そういうわけで、俺は疲れた体に鞭打ちながらも酒場を探して町を歩いてきた。いたのだが……この町、広い。

ゲーム画面と現実では物の尺度が違うということは今更ながらに実感した。先程からゆうに20分は歩いているのだが、酒場の存在する区域には辿りつけていない。

若干辟易しつつも歩き続け、さらに20分程経ったところで目的の場所に着いた。

この界隈はいくつもの酒場が固まっけていて、どこか混沌とした様相を醸し出している。

その中でも太陽をモチーフにした看板を掲げた店を見つけ、戸を横に滑らせて店内に入った。

室内はランタンの灯りが怪しく揺れていて、匂いも酒臭い。

店内の各所には丸テーブルが設置されていて、テーブルを囲んだガラの悪そうな男たちが酒をかつ喰らいながら何事かを喚いている。

この酒場は太陽亭と言って、ゲーム内ではプレイヤーに対してクエストを提供する施設だった。俺も序盤の金策では重宝した記憶があ

る。

この世界においてここがそういう施設であるかは確証が持てないが、確率は高いだろう。

俺はカウンターへと足を進めた。

席に着くと酒場のマスターが不遜な態度でオーダーを取りに来たので、静かに「……酒」と返す。

酒場に来たらこれは外せないだろう、いわゆる様式美と言うやつだ。…… 本人が酒を飲めるかどうかは関係ない。未成年だしね。

しばらくすると、店の奥へと行っていたマスターがジョッキを片手に戻ってきた。

スツと俺の手前にジョッキを置くと、一歩下がって洗ったグラスを拭き始める。

まさにテンプレといった行動に俺は興奮を隠せなかった。そう、酒場と言ったらこれだよ！

そのまま酒に手をつけない俺を怪訝に思ったのかマスターが口髭を動かして喋った。

「お前さん……酒は飲まねえのか？」

見かけ通りの渋い声色でマスターが言った。

俺は迷うことなく言葉を返した。

「旅の者だ、情報を聞きたい」

そういつてカウンターに五千Gコインを置いた。

マスターは僅かに目を見開いたが、すぐに元の無然とした表情に戻った。

ゲームの中では初期の依頼報酬はおおよそ八千G、命をかける冒険

者の一回の仕事量がそれほどなのだから一般人にはそれなりの金額だろう。

それはこの世界でも変わらない筈だ。

ちなみに金は町までの道中で拾った。モラルだとか教義だとかそんなモンは関係ねえ。

「……して、何が聞きたい？」

ちやっかりGを懐に回収したマスターが幾分機嫌の良さそうな顔で呟いた。

別にこんな真似しなくても世間話を装ってこの辺りの情勢を聞くだけでもよかった。

ただ俺がこのやり取りを試してみたかっただけだ。

しかし、やってしまったものは仕方ない。ここは一つデカイ事を聞いてみよう。

「……金になる仕事を」

知らない町に来たらとりあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんと言ってた。

さっさと主人公組に絡ませたいぜい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838z/>

RPGW(・・)RLD ぼくのステキなDA 天使サマ

2011年12月10日10時54分発行